

第11回日本整形靴技術協会学術大会東京大会

The 11th IVO JAPAN CONGRESS in TOKYO

「ファッションとオートペディシューズ」



会期：2015年1月30日(金)、31日(土)

会場：ザ・ガーデンホール(恵比寿ガーデンプレイス内)

主催：日本整形靴技術協会

大会長：青木 淳 株式会社シュリット

事務局：株式会社シュリット

後援：ドイツ連邦共和国大使館、在日ドイツ商工会議所、在日スイス大使館、
一般社団法人 足と靴と健康協議会 (FHA)



日本整形靴技術協会

靴医学から見たファッションとオートペディシューズ

文化学園大学特任教授
元日本靴医学会理事長

井口 傑

会長さんから「靴医学から見たファッションとオートペディシューズ」について講演を頼まれました。オートペディシューズとはドイツ語のOrthopadie整形外科とshoes靴の合成語ですから、整形外科靴とでも訳すのでしょうか。ちなみに、会長さんの会社のホームページには「整形外科の知識に基づいてつくられた靴。アインラゲン(特殊な中敷)などを駆使して、足の残存機能を高めます。」と書かれていました。

ファッションは英語のfashion、流行、好みと訳されます。動詞として物を作る、形作ると言う意味もあります。ここでは、機能と直接関係ない患者さんの好みやデザイン、色、材質による外観上の嗜好を指すものと思います。

靴医学は最も分かり難い言葉ですが、20数年前に何人かの整形外科医が勝手に創った言葉です。折角足を手術して歩けるようにしても、履ける靴がないので社会復帰できない患者に対して、医学知識を靴製作に応用して、外でも履ける靴を作ろうと言うのが始まりです。

それまでも、日本でも靴型装具や義足を扱う分野は整形外科にありましたが、欧米では戦前から靴が普及していたので、整形外科靴に関する需要は大きく、知識や経験の蓄積もあり、マイスターなど専門職の制度も先行していました。しかし、現在、日本でも靴を履かずに社会に出ることは考えられず、また、整形外科靴に対する要求は多様化すると同時に、贅沢に、言い換えると高度化してきました。その一つが、「痛くなく歩けても、どた靴は履きたくない」という、ファッション性の要求です。

このはしりは、「ハイヒールと外反母趾」「足の外科医と女性」の争いにあつたと言えます。いまだに明確な調査は行われていませんが、戦後の外反母趾手術数とハイヒールの生産量が平行であるが故に「ハイヒールが外反母趾の重要な原因」と言う加藤正先生の研究を嚆矢とした疫学的原因論は広く信じられています。ですから、足の外科医にとってハイヒールは天敵に等しい存在で、外反母趾を無くすために目の敵にしてきました。この運動は長時間かかりましたが、ある程度の成果を収め、喫煙ほどではありませんが、ハイヒールは足に悪いという認識が女性の中にも広まってきました。

一方で、医療におけるQOL(quality of life)生活の質の向上が強く叫ばれるようになってきました。足の外科においても、単に歩行が出来るだけでなく、より快適な生活が営めることが要求されてきました。歩けるなら見栄えなど少々の事は我慢しての時代から、健常人と同じQOLが求められる時代になったのです。

まずは、義肢装具士の中から、子供に喜ばれるような可愛い内反足用の靴型装具、脚長差や高度の変形に対する靴型装具においても、せめて色や材質だけでも患者に喜ばれるようにと言う動きが始まってきました。思った以上に患者から感謝されたという喜びの声が上がりました。障害者の社会進出に伴って、靴型装具にもスムーズに社会へ受け入れられる工夫が必要になっています。

それに続く波として、慢性関節リュウマチや外反母趾の患者から、市販靴に対する要請が出てきました。主に、市販靴の調整を行う、コンフォートシューズを扱う靴小売店のシューフィッターから、痛くない靴、歩ける靴だけで良いのだろうかという疑問が上がってきました。せめて冠婚葬祭にはフォーマルなパンプスが履きたい、たまの外出には靴にもおしゃれがしたい、折角のおしゃれな服にあった靴が履きたいと言う、医療の現場では中々聞かれなかった声を拾い上げる研究が発表されるようになりました。

靴医学の先達達が夢見た、手術の後にも履いて出られる靴から、障害者も生活を楽しめる靴へと発展が、今始まっています。機能とファッションの癒合を目指した新しい波と言えるでしょう。今は閉鎖されてしまいましたが、ニューヨークのメトロポリタン美術館の靴の展示室にあった「機能に優れた靴は美しい」と言う言葉が忘れられません。



PROFILE

いのくち すぐる
井口 傑

昭和20年10月11日生

昭和45年 3月	慶應義塾大学医学部 卒業
昭和45年 4月	慶應義塾大学整形外科 助手
昭和52年 6月	スエーデン王立カロリンスカ研究所 日瑞基金派遣研究員
昭和57年 3月	慶應義塾大学 医学博士
平成 2年 4月	慶應義塾大学整形外科 講師
平成11年 6月	日本靴医学会会長 日本足の外科学会会長
平成11年10月	世界足の外科学会 副会長・理事
平成16年 9月	日本靴医学会 理事長
平成17年 4月	慶應義塾大学医学部 総合医科学研究センター・整形外科 教授
平成20年 3月	慶應義塾大学医学部 退職
平成23年 9月	日本靴医学会 理事長 退任
平成24年 4月	文化学園大学特任教授
平成25年 2月	地方公務員災害補償基金 審査会会長

専門医	日本整形外科学会
名誉会員	日本足の外科学会 日本靴医学会
編集委員	The Foot and Ankle Surgery Journal of Orthopaedic Science Foot Medicine and Surgery
顧問医	厚生労働省社会・援護局 総務省恩給局 日本放送協会